

に載った最初でした。その「電柱ものがたり」が好評で、二番目に書いたのが「かくまきの歌」という短編でした。

——「かくまきの歌」は第六回日本児童文学者協会の新人賞を受賞した作品ですね。

杉 そうですね。新人賞は他に、長野県の宮口しづえさんの「ミノスケのスキー帽」も一緒に、宮口さんとは、それ以来親しくお付き合いをするようになりました。その後、関先生のご指導により出した短編集『かくまきの歌』が割と好評だったので、後もあまり苦労することなくコンスタントに短編集を出すことができました。

——先ほどの新人賞は「かくまきの歌 他」、ということでの受賞でしたが、「他」の作品は何だったのでしょうか。

杉 「百ワットの星」だったと思います。あれは少し不運な作品でした。あまり評判にならなくて名残惜しいんですけども。私は好きなんですけどね。

——『日本児童文学』の一九五七年九月号掲載作で、電気会社で働く喜びや定時制で学ぶ喜びに目覚めていく姿を描いた、いい作品でした。そうすると割と、とんとん拍子できたということですね。

杉 そうなんです。私はすぐく運がいいんですね。

——ご本名は小寺佐和子さんですが、「杉みき子」というペンネームはいつ頃からお使いになったのですか。

杉 『新潟日報』の「お母さんの童話」に書き始めた時から

らですね。

——すると、デビューと同時にということですね。そのペンネームの由来もお聞かせください。

杉 高田は杉の木が多いし、また私自身、杉の木が好きで、花よりもどっしりした幹の方が似合っているのかなということからです。

□小川未明との出会い

——書き始めた頃は『婦人公論』に応募していた時期もあったようですが、なぜ大人向けではなく、児童文学を書き続けるようになったのですか。

杉 私は大人向けではないなと思っっているんです。どこか大人向けの小説に偏見みたいなものがある、ああいうどろどろとしたものは書けないなど。大人向けの小説は自分の畑でないような気がしたんですね。やはり、初めに足を

